

# 「満洲国」の建国大学における中国人学生の反満抗日運動 — 1938 年の開学から 1941 年の 12・30 事件までを中心として —

中山 紀子

## Abstract

The anti-Manchurian and anti-Japan movements in which Chinese students at Kenkoku (Jianguo) University took part had an impact that would blow away the significance of the university's existence. The academic environment was one of freedom and equality based on the philosophy of ethnic cooperation; such an atmosphere had not been seen at any other university. Many Chinese students were arrested for their participation in the anti-Manchurian and anti-Japan movements and imprisoned for a period of 10 to 15 years, or for life. Questions remain as to what prompted the Kenkoku University students to participate in the anti-Manchurian and anti-Japan movements, and how they interpreted the philosophy of Kenkoku University. This study surveys historical materials, such as oral histories, to find out what Kenkoku University was like for Chinese students and to determine their identities.

キーワード……建国大学 反満抗日運動 12・30 事件 民族意識

## はじめに

建国大学とは、「満洲国」の首都新京に創設された大学であり、満洲国の最高学府である。本論文は、建国大学の中国人学生が秘密裏に、しかし活発に展開していた反満抗日運動について論じるものである。建国大学に関する先行研究には、主に宮沢恵理子『建国大学と民族協和』（風間書房、1997 年）、山根幸夫『建国大学の研究—日本帝国主義の一断面—』（汲古書院、2003 年）がある。宮沢は教育史の視点から、山根は日本帝国主義の角度から見た歴史的存在としての建国大学を論じている。その中で、建国大学における反満抗日運動に関する研究は山根が詳しい（「第四章 民族協和の虚構—副総長作田の退任」）。山根は建国大学における日本人と中国人（漢族）の間にあった矛盾や対立を詳細に考察している。また、反満抗日運動が活発化した原因として、読書会活動を挙げている。その読書会活動が活発化した要因としてさらに建国大学入学規定の一部変更があったと指摘している。建国大学入学規定の一部変更により 1 年間日本人不在の「四族」のみの共同生活の時期が発生し、それが中国人学生の反満抗日運動に対して大きな意味をもたらしたということである。

本論文では、日本人と中国人の民族対立という視点ではなく、満洲国に組み込まれた建国大学という政治的意味を多分に含んだ機関の中で、中国人学生の自己認識、つまり「我々は中国人である」という意識がどのようにして覚醒したのかにスポットを当てる。建国大学中国人学生の回想録を見ると、建国大学や満洲国、日本帝国主義に対する批判が書かれているが、それは建国大学の日本人学生に対する批判と同一視することはできない。確かに、日本人学生に対する中国人学生の批判はあったであろう。しかし、本論文において、それは問題の本質ではない。中国人学生の批判の先にあったものは目の前の日本人学生ではなく、関東軍に操縦された建国大学そのものであり、満洲国および日本帝国主義であった。

建国大学における中国人学生の反満抗日運動について、まずは背景として「五族」が共同生活した「塾生活」および建国大学における「共通語」としての日本語使用の環境について検討する。次に反満抗日運動の契機と考えられる原因として、建国大学入学規定の一部変更、建国大学図書館の存在および「読書会」の形成について考察する。

「民族協和」の理念の下に創設された建国大学において、中国人学生が彼らの民族意識をどのように覚醒させていったのかについて、個人の知識吸収としての読書、読書会グループの結成、反満抗日組織結成の過程および1941年に建国大学生が反満抗日の罪で検挙される事件までを辿ることとする。

## 1 建国大学における反満抗日運動の背景

### 1-1 建国大学における「共通語」—日本語の役割

1938年5月に設立された建国大学は満洲国國務院直轄であり、そこには満洲国を構成するとされる五族（日、満、鮮、蒙、露）、つまり日本人、満洲人（漢族・満洲族）、朝鮮人、蒙古人、白系ロシア人が集まっていた。建国大学は前期3年、後期3年の計6年制の大学である。建国大学は全寮制であり、「民族協和」のスローガンの下、満洲国官僚になるべく入学した学生が共同生活し、共に学び、切磋琢磨しながら、民族協和を実践することになっていた。建国大学は「自由」であり、「平等」であった。

建国大学が創設された1938年は、日本では4月に国家総動員法が制定され、前年の1937年7月には盧溝橋事件により日中全面戦争が始まり、12月には日本軍が南京を占領している。建国大学創設の翌年1939年9月は第2次世界大戦が勃発した年である。教育面では、1937年3月、文教部令「学校教育に於ける日本語普及徹底に関する件」が出され、満洲国の学校教育において日本語の普及が進められた。そして、1937年5月2日、「新学制」、すなわち学事通則（即日施行）と国民学校ほか9種の学校令、次いで同年10月10日国民学校規定ほか8種の学校規定が公布され、同年11月8日、学制移行要綱を各省長に訓令、翌1938年1月1日より学校令

及び学校規定が施行された<sup>1)</sup>。新学制以前は、「満語」(中国語)と蒙古語が国語とされていた。しかし、新学制において「日本語は日満一徳一心の精神に基き国語の一として重視す」<sup>2)</sup>とされ、日本語は満洲国の国語の一つとされたことにより、学校教育では語学教育の必修科目としての日本語授業時間数が増加した。1938 年には官吏登用制度において、「日系」以外の全ての民族に日本語の語学試験が課されることとなった。したがって、建国大学が設立された 1938 年には、制度の面から見れば、満洲国における「国語」としての日本語の地位は突出することとなった<sup>3)</sup>。

民族協和を実践し、満洲国のための人材を養成する建国大学でも例外ではなく、満洲国の言語政策と同様に日本語の地位は高く、学内の「共通語」は日本語であった。カリキュラムや学則を見る限り、建国大学で日本語を共通語とする規則はどこにも見当たらない。にもかかわらず、日本語が共通語として通用した理由は何か。満洲国の制度の面から見れば、新学制の公布は満洲国の教育政策における一つの転換点であり、その翌年に開学した建国大学もその影響を受けたと考えることができる。ただ、建国大学における民族協和の理念を鑑みれば、新学制を境に日本語が国語の一つとされたことと建国大学の共通語が日本語であることに、必ずしも直接関連があるとは考えにくい。なぜなら日本語を共通語と定める文言はどこにもないだけでなく、学科科目を見ると、「漢語」(中国語)と日本語が語学の必修科目とされており、日本語と中国語が並置されている。したがって、建国大学の教育カリキュラムから見れば、むしろ日本語と中国語の「バイリンガル養成」の側面があったと考えられる。おそらく、建国大学の教員のほとんどが日本人であったこと、また塾生活を指導する塾頭が日本人のみであったこと、さらに「五族」とはいうものの学生のおよそ半分が日本人であったことから、建学当初から必然的に日本語が飛び交う環境が形成されていたのだろう。また入学試験は日本語で行われ、入学後の授業もほとんど日本語で行われていたため、次第に「共通語は日本語でなければならない」という暗黙のルールが作られていったと考えられる。建国大学中国人学生の回想録には、授業のみならず日常生活全般において日本語で話さなければならない環境に戸惑い、反発を覚えたとの感想が多く書かれている。しかし、以下で検討するように、中国人学生は大学生活全般において事実上日本語が上位にある環境を逆に利用し、「我々は中国人である」という民族意識を高揚させることができた。つまり、秘密裏に反満抗日運動をおこなう際には中国語を使用することで、ほとんど中国語が分からない日本人の目をかいくぐることができたのである。

## 1-2 塾生活

建国大学には「塾」があり、各民族の学生は生活全般を塾において共同でおこなっていた。これを「塾生活」といった。「建国大学学則」第 19 条には「学生は之を塾に収容す」<sup>4)</sup>と定められ、塾生活は建国大学教育の大きな柱であった。例えば、第 1 期入学生は 150 名(日系 75

名、満系 50 名、朝鮮人・蒙古族・白系ロシア人 25 名）であり、民族の比率は平等に、25 人ずつ 6 つの塾に分けられた。塾毎に「塾頭」が置かれ、塾頭がそれぞれの塾を管理監督し、塾頭により「指導学生」が選出された。指導学生は塾のまとめ役であり、塾頭の管理監督の下、他の塾生に対し指導をおこなった。それぞれの塾に「日系」1 名、「満系」1 名が指導学生に任命された。指導学生が「日系」と「満系」から選出されることとなった理由は、それぞれの民族比率から見ると「日系」学生と「満系」学生の割合が多かったためと推測されるが、明らかではない。

塾生活について、「建国大学塾綱領」<sup>5)</sup>は次のように定めている。

「塾は起居の間に建国精神の神髓を体得し其の昂揚に不惜身命の自覚と信念を培ふ道場なり。

一、塾に於ては共同生活を通して全員を永遠の同志たらしめ協和精神の実践的先覚者たらしむ。

二、塾に於ては本学の教育主旨に基き学生をして品性の向上健康の増進知能の啓発情操の陶冶につき切磋琢磨せしむ。」

建国大学では、その学生は「永遠の同志」、そして「協和精神の実践的先覚者」となるべく、「切磋琢磨」するために、五族の学生が「共存」するとされていた。建国大学における塾の存在意義は、まさに「民族協和の実践」であった。

中国人学生にとって、塾生活とはどのようなものだったのか。ある元学生は次のように証言している<sup>6)</sup>。「塾生活には決まった段取りがある。毎朝、太鼓の響きで起床。内務（布団と毛布を、積んだ棟瓦のように折目きちんとたたむこと、屋内掃除など）が済んでから、朝礼をおこなう。塾別に並んで学年順に人数点呼、国旗掲揚。『満洲国』とは言っても、日章旗と偽政府の五色旗を同時に掲揚する。それから『遥拝』。これは『宮城』（溥儀の皇居）と『皇居』（裕仁の皇居）とを最敬礼で拝む。---（中略）---遥拝が済んでから建国廟まで駆足、それから体操。『建大』体操は特殊なものであった。一般学校に普及していた『建国体操』ではなく、ただ二つの動作を繰り返すだけの運動である。一つは『天を突く』と言った。拳を上突き出すと同時に『よいさー』と叫ぶ。もう一つは『地球を廻す』と呼んでいた。両足を前後に開いて胴体を前にかたむけ、両手を、ろくろをまわすように、前から後に引くと同時に『よいさー』と叫ぶ。この体操をとおして、この未来の先覚的指導者たち、すなわち帝国主義の手先たちの、乾坤一擲、山河を呑む気を培おうというのであろう。朝礼が済むと塾に帰って正座をする。正座は日本独特の跪く坐り方である。約十分間の正座が済んでから朝食」。食事に関しては、「一日の三食は全学が大食堂で一緒に食べる。箸を取るまえに和歌を朗誦する。当番の音頭取りで一同声をそろえて、『たなつもの百の木草も天照らす日の大神の恵み得てこそ』と唱えなければならなかった。「たなつもの百の木草も天照らす日の大神の恵み得てこそ」は和歌であり、神道における食前の祈りである。

また、別の中国人学生の証言によると<sup>7)</sup>、「塾生活というのは、半分ぐらい軍隊みたいな生活。朝は 5 時半ごろにラッパと太鼓の音で起こされて、体操をし」た。「それから炊事も学生が全部自分でやる。みんな順番で炊事をする。自分でじゃがいもや野菜などを作って、それを食べる。それから乳牛も飼っていて、その乳を搾ったり、そういうのを全部自分たちでやった。」当時満洲国では、日本人は白米、中国人は高粱が配給されていた。一般の大学でも同様にそれぞれ食事は分けられていた。例えば哈爾濱工業大学の中国人学生の証言によると<sup>8)</sup>、「中国人学生と日本人学生は同じ食堂で食事をしていたが、中国人と日本人の学生の坐る席が分けられており、彼らが食べるのは米で、私たちが食べるのはコウリャンであった。しかも質が非常に悪く、ネズミの糞などがしょっちゅう混じっていて、とても喉を通るものではなかった」という。また、吉林師道大学の中国人学生は<sup>9)</sup>、「食堂は寄宿舎の地下にあり、テーブルが東西二列に並べられていた。一つは『日系』の専用で、米のご飯が出た。もう一列は『満系』のためのもので、ここはコウリャンとトウモロコシであった。このように民族分割統治の方針がはっきり現れていた」という。しかし建国大学では、民族の別なく、みな平等に食事ができた。「当時満洲は配給制だったから、日本人には一定量のお米をくれる。中国人にはお米は全然なくて、高粱が配給された。建国大学ではそれを全て一緒に混ぜて食べて、区別しなかった。中国人の高粱飯と日本人のお米を全部一緒にして食べた<sup>10)</sup>」という。民族協和の実践をするべき建国大学において、全ての民族は平等とされ、食事ではそれが確かに実行されていた。しかし、その建国大学では日満両国旗の掲揚や東方遥拝がおこなわれ、また正座や神道など、建国大学教育の柱である塾生活の隅々で、日本文化や神道の思想が散りばめられていたことが分かる。

また、「建国大学令」第 21 条では「建国大学の学生の在学中の費用は官費とす」、「建国大学学則」では「学生在学中各人に必要な被服其の他の使用品は之を貸与し糧食其の他の消耗品は之を支給す<sup>11)</sup>とされた。ある中国人学生 1 期生の証言によれば<sup>12)</sup>、「入学者には、各学生に制服一式、革靴一足、乗馬靴一足、それに三八式歩兵銃一丁が支給された。各学生は自分の銃の番号をしっかりと覚えておくよう要求された」とのことである。「大学に入学して、何故一人一丁の銃が必要なのか？学生は勉学をするために来たのだ。兵隊に来たのではない。心中不満であった。---（中略）---寝室の一部の両側に歩兵銃架があった。普段各学生の歩兵銃は均等に並べられていた。「まるで学生宿舎ではなく、兵営ではないかと思わせる！これはまた私には不愉快であった」。銃の貸与の理由は明らかではない。建国大学の教育内容を見ると、学科科目と訓練科目があり、訓練科目には軍事訓練、武道訓練、農事訓練の 3 種があり、軍事訓練は軍人の指導による本格的な訓練であったため、おそらく銃の貸与は軍事訓練で使用するためであったと考えられる。

日本語の共通語化や日本文化、神道などを除いて、規則としては全ての民族に対してあらゆる事柄が平等に定められていた。しかしそれは、衣食住の基本的生活に関わる事柄に限られて

いたと言えるだろう。民族協和とはいうものの、常に日本語で話さなければならず、食事の提供は平等でも食事の作法は日本式に統一され、多くの中国人学生は、それらの一つ一つに疑問を抱いていた。反満抗日運動で後に逮捕された 2 期生は<sup>13)</sup>、「当時校内の中国学生と日本学生は一緒に食べ、住み、授業に出て、訓練を受けた。食、衣、住、費用等の待遇は、表面上は同じで、一見全く平等に見えたが、精神的には心の深いところで一種の沈痛な抑圧感があり、「毎日いつも『満系』と言われ、その呼称は日本同窓が優越感を表すもので、私には感情的に受け入れ難いものであった。このように民族の自尊心が傷つけられることは、学内でいつもあるだけでなく、校外の社会では更にひどかった」という。

## 2 建国大学における反満抗日運動の契機と展開

本節では、建国大学の中国人学生による反満抗日運動の基となった塾生活での民族構成の変化、盛んな読書活動の契機を与えたと考えられる建国大学図書館の存在および「読書会」の結成について考察する。満洲国の最高学府であり、民族協和の理念の下に「自由」で「平等」であるはずの建国大学であったが、1942年3月2日、反満抗日運動に参加したことにより建国大学中国人学生が逮捕された。反満抗日運動に対する検挙では、1941年12月30日に行われた一斉検挙において、軍官学校、哈爾賓医大、哈爾賓農大、錦州農大、新京工業大学等の学生も逮捕された。建国大学生の逮捕は、満洲国に衝撃を与えた。「民族協和」を理念とする建国大学でなぜこのように盛んに反満抗日運動が展開されたのか、また民族協和という一見して理想的なスローガンの裏に、どのような矛盾が潜んでいたのかを検討する。

### 2-1 建国大学入学規定の改定が「満系」学生に与えた影響

「建国大学令」第16条に「建国大学前期に入学し得る者は国民高等学校を卒業したる者又は総長に於て之と同等以上の実力ありと認むる者にして選抜試験に合格したる者とす」<sup>14)</sup>とされ、また1940年5月10日、院令第20号をもって「建国大学学則」が制定された<sup>15)</sup>。その「建国大学学則」の第25条に「一 国民高等学校の卒業見込者及卒業生又は之と同等以上の学力ありと国家に於て認定したる者」、「二 日本国学制に依る中等学校（五年制）の卒業見込者及卒業生又は之と同等以上の学力ありと国家に於て認定したる者」、また「前項二号に該当する者にして入学を許可せられたる者は之を前期第二学年に編入す」とある<sup>16)</sup>。

建国大学第1期生を募集する「満洲建国大学学生募集広告」<sup>17)</sup>の志願資格を見ると、「日本内地人、朝鮮人、台湾人に関しては昭和十三年三月末日迄に日本内地、朝鮮、台湾の中等学校（師範学校、中学校、甲種実業学校、高等普通学校、一関東州、満洲国の日本人中等学校を含む）の四年修了見込者、卒業見込者、及卒業生、並に右と同等以上の実力ありと国家に於て認

定したる者」とされている。日本の中等学校は5年制であったが、「日系」学生（日本人、朝鮮人、台湾人）は中学4年修了でも成績がよければ入学することができた。当時の日本では、中学4年修了で成績がよければ高等学校に入学できたため、それにならったのであろう。しかし、1940年の学則の制定により、「日系」学生の入学資格は中等学校5年卒業見込み者及び卒業者とされ、満洲国の国民高等学校は4年制であるから、「日系」学生と「満系」学生との間に1年の差が生じることとなった。1940年入試、1941年入学の建国大学第4期生より、国民高等学校卒業の「満系」学生はこれまで通り建国大学第1学年に入学し、日本の中等学校を卒業した「日系」学生は建国大学第2学年に入学することとなった。建国大学は1941年（康徳8年）4月10日、学則の改正により第4期入学生、第1学年77名、第2学年91名に対し入学式を挙行了した<sup>18)</sup>。

「日系」学生と「満系」学生の1年の差は、凶らずも建国大学における民族協和の実践に影響を与えることとなった<sup>19)</sup>。建国大学の塾生活は共同生活の場であり、民族協和の実践の場とされていた。しかし、この学制の変更により生じた「日系」と「満系」の1年の差は、殊に「満系」学生にとって非常に重要な意味をもった。建国大学の4期生であった聶長林の回想によると<sup>20)</sup>、1941年1月、聶長林が入学後に配属されたのは「十六塾」で、「漢族が19人、満族1人、蒙古族2人、朝鮮族1人、ロシア族2人」だった。ここには日本人がいない。一緒に入学した日系学生はすぐに2年生となったからだ。聶長林の塾では、入塾初日、上級生の指導学生が全員を集め、顔合わせを行った。「25名の同学は5つの民族から来たものではあるが、長い間の雑居で、いずれも中国語（当時は『満語』といった）が通じる。しかし初対面の集会では、皆日本語でしゃべった。塾頭先生と指導学生の一人が日本人であるが、[塾頭の]石田先生は東亜同文書院の出身で、学校では中国語を教える先生であった。[指導学生の]嵐田さんは天津生まれで、中国人の乳母に育てられ、五歳まで日本語が分からなかった。お二人とも流暢な中国語をしゃべることができる。お話の中に時々中国語をまぜていた」。しかし、建国大学では、日本語の共通語化により、日本人が中国語を話せたとしても、日本語を使用しなければならないとされた<sup>21)</sup>。厳しい入学試験を突破してきた彼らの日本語能力は高かったとはいえ、初めから日本語だけでコミュニケーションすることは簡単ではなかったであろうし、当然のように日本語が共通語とされた環境に置かれたことに対して、入学当初から戸惑いや反感を覚えた中国人が少なくないことは、彼らの回想録から明らかである。しかし、1941年入学の第4期生からは、最初の1年間は日本人がおらず、日本人の目を気にする必要はなくなった。後に見るように、この時期建国大学ではすでに読書会や反満抗日運動が活発に行われていたことを考えれば、この1年間の塾生活は彼らにとって非常に大きな影響を与えたに相違ない。4期生以降、「満系」の指導学生は日本人の目を意識する必要はなくなり、1年生の塾では中国人の指導学生と新入生の親密度が急速に高まった。

次いで、建国大学図書館の中国人学生の反満抗日意識の高揚に果たした役割を検討する。

## 2-2 建国大学図書館の中国人学生に与えた役割

建国大学図書館の蔵書は非常に豊富だった。学生は図書館の本を自由に読むことができた。そこには毛沢東の本があり、また巴金、魯迅、郭沫若など、中国の大作家の本などもあり、自由に閲覧できた。当時満洲国では、このような本は禁書とされ、読むことは許されないものであった。しかし建国大学の図書館は特殊で、蔵書の多さと自由な環境は他のどの大学にもないものだった。建国大学は満洲国における国务院直轄の最高学府であり、満洲国の指導者を養成する目的で設立された大学であった。満洲国における建国大学の存在意義から考えれば、建国大学図書館の蔵書が豊富なことは容易に想像できる。蔵書の内容・構成は多岐に渡り、学生を惹きつけた。建国大学図書館には当時満洲国では禁書とされた図書が所蔵されており、それらには一部伏せ字はあったとしても、それらを学生が自由に閲覧できた。それが可能だったのは、建国大学副総長であった作田荘一思想によるものと考えられる。作田荘一は「満洲国学」の確立を目指しており、そのため教員や学生に対して思想的な規制は設けなかったという<sup>22)</sup>。膨大な数の図書とその内容の充実の理由は何か。その理由の一つとして考えられる建国大学図書館を国立図書館にするという案を考察したい。

満洲国では、新京に国立図書館を設立するという案があり、建国大学設立過程において、建国大学図書館をその国立図書館とする構想があった<sup>23)</sup>。国立図書館設立の構想には建国大学案と民生部案があり、国立図書館構想をめぐって建国大学と民生部が対立していた。両者の対立によりおよそ1年の足踏み状態の後、両者の案は統合され、1938年8月、「国立中央図書館設立籌備要綱」が決定された<sup>24)</sup>。国立中央図書館開設の準備機関として「国立中央図書館籌備処」が置かれたが、最終的に国立図書館は設立されず、満洲国解体とともに国立中央図書館籌備処も消滅し、国立中央図書館設立は準備段階で終わった。

建国大学図書館の国立図書館構想は、建国大学設立準備段階から考えられていた。1937年6月7日、建国大学創設準備委員会東京委員会において「建国大学創設要綱案」が決定されたが、その中に図書館開設に関する規定が書かれている。「成るべく速に新京に大学図書館を建設し、内容の充実を図る、是が為北平の図書館（外務省文化事業部）、大連満鉄図書館及満洲国内に散在しある文献を蒐集移管する如くし、之を基礎として、亜細亜全般に亙る図書の蒐集を積極的に開始す、特に可及的速に研究院に必要な図書資料を整備す」<sup>25)</sup>として、建国大学創設準備の比較的早い段階から、広い範囲からの図書の収集が考えられていた。その後、「建国大学図書館開設要綱」によれば、建国大学図書館の特色として「一、亜細亜に関する最高の研究図書館たること」、「二、目による教育機関として施設し将来博物館に拡大す」、「三、一般に公開するものとして考えられている。「建国大学の図書館は大亜細亜文化の天府たるへし」、「実に図書



館の開設は大学創設の先決要件にして立学の精神に則り亜細亜全般に亙る図書の大蒐集を積極的に敢行するを要す」ともとされた。「英国の世界制覇は大英博物館に表現せられ、ナポレオン覇業はパリ国立図書館に見るべし」であり、「建国大学図書館の規模は満洲国運の前途をとすといふも過言に非ず」と考えられた。想定された準備資金の規模も相当な金額であった。

1937年7月7日、満洲国より「満洲国建国大学に北京科学図書館書籍利用方に関する件」と題する書簡が日本の外務省に送られ、「王道主義に則り建国大学を創設したる処開設日尚浅く研究資料の蒐集意の如くならず殊に満洲には従来文化の程度低く漢籍図書類極めて少く為に研究上多大の困難を感じ」ているため、「在支文化事業関係の北京科学図書館等には満洲国内に於て渴望する旧漢籍図書類豊富に収蔵せられ居れるに鑑み満洲国建国大学に右資料利用」を申し出ている。大連の満鉄図書館にも同様に交渉を求めた<sup>26)</sup>。

1937年8月5日の「建国大学創設要綱」によれば、最終的に「北平の図書館（外務省文化事業部）、大連満鉄図書館及満洲国内に散在しある文献を蒐集移管する」という文言は削除され、「成るべく速に大学の構内に国立図書館を建設し内容の充実を図る<sup>27)</sup>」とされた。同年12月15日の「東方文化事業総委員会図書館図書に関する件」と題する書簡によると<sup>28)</sup>、日本の外務省は「東方文化事業総委員会図書館は将来我方に於て実行すべき北支文化事業中東方文化研究発揚の最主たる要素たるべきものにして該図書館図書は一括之を北京に保存することを必要とし各地に分散すべきに非ず」、「満洲国建国大学としては先づ民間散在の図書に付希望図書の蒐集を」するよう満洲国に求めている。「北京図書の強制的且目立ちたる国外搬出は北支文化事業保護の我方文化政策より見るも適当に非ずと信ず」、「何れにせよ文化事業部としては東方文化事業総委員会図書館は該図書館本来の性質並我方対北支政策遂行の見地より其の所有図書の譲渡及国外移送は絶対之を為さざること」と伝えられた。北平の図書館および満鉄大連図書館の図書の移管は不可能であったにもかかわらず建国大学に蒐集移管することが期待されたのは、図書の蒐集が建国大学の創設の目的を成すために必要と考えられたからであろう。つまり、道義世界建設の先覚的指導者となるべく人材を養成する大学であるため、民族協和、王道楽土、日満一徳一心、道義世界の実現という満洲国の精神を究めるためであると考えるのが妥当だろう。

結果として、建国大学図書館を国立図書館にするという構想は通らなかつたが、実際、建国大学には図書費はふんだんにあり、年間30万円の図書費を使って満洲に参考になるものは何でも購入していたという<sup>29)</sup>。また建国大学には各方面より図書が寄贈されている。1938年4月30日、建国大学総長張景恵の名において、日本の外務省文化事業部第一課長宛てに「御関係諸機関の各種出版物及び其他の資料は御差支無之限り此際過去のものに遡り」建国大学に寄贈を依頼する書簡が送られ、同年5月27日、宇垣一成外務大臣より満洲国駐劄特命全權大使植田謙吉宛てに、計138部の資料が木箱3箱に収められ、建国大学へ寄贈された<sup>30)</sup>。また1942年にはドイツより建国大学に洋書2060余冊が寄贈されている<sup>31)</sup>。

「満洲国」の建国大学における中国人学生の反満抗日運動（中山紀子）

また建国大学には研究院があり、大学図書館とは別に、研究院には付属図書館が置かれていた。「研究院開設の趣旨」によると、建国大学研究院とは「満洲建国の本義を拡充顕現すべき帝国最高の学府にして且大学の研究及教育の淵源たる中枢機関」であり、文科系諸学科の総合的機関として1939年1月にスタートした。研究院のメンバーは建国大学、大同学院、その他各大学および指導高等学校並びに中央陸軍訓練処の教員や職員、さらに政府および協和会職員などで構成され、國務総理大臣により選任または委嘱された。建国大学副総長の作田莊一がその院長であり、「研究院が大学内に設置されたる趣旨の第一は大学の教養を深め整えんが為」、「第二は満洲国運の開頭に貢献する實際問題を究明する」ことを目的とした。研究院には多くの図書が置かれ、図書の担当者は「満洲に参考になるものは、なんでも買ってこい」と言われ「掴み金で買いに行く」ほどだった<sup>32)</sup>。こうして研究院図書館には多くの図書が集まった。研究院図書館を利用する資格のない学生たちが、こっそり忍びこんで社会主義関係の書籍を持ち出すこともあったようである<sup>33)</sup>。

これまで述べたように、建国大学図書館および研究院図書館には社会主義、マルクス主義、或いは三民主義や毛沢東思想に関する図書まで多数購入され、学生は図書の閲覧は自由であった。後述の「読書会」に代表される中国人学生の活動は、図書館があつてこそ可能であった。中国人学生にとって建国大学での読書は非常に重要な意味を持っていたのである。建国大学の膨大な蔵書により彼らは知識欲を大いに刺激された。もちろん彼らを反満抗日に向かわせたものは図書だけではない。先に述べたように塾生活の中の日本文化や神道は中国人学生に逆の作用を引き起こした。しかし、建国大学の中国人学生にとって、図書館が果たした役割は甚だ大きかったと言わざるを得ない。このことは他のどの大学にもないことであった。中国人学生はそれをうまく「利用」することで彼らの反満抗日運動は大きく拡大した。

## 2-3 読書会

中国人学生が読んだ本の入手経路は、建国大学図書館、建国大学研究院の付属図書館の他、後述するように、書店での購入、外部との接触によるもの等、いくつかの入手方法が存在していた。

建国大学での読書について、ある中国人学生の証言によると<sup>34)</sup>、「学校に入るとすぐに愛国や革命の本に触れました。当時わたしは、入学後に上級生から貰った共産党や国民党の書籍を読んでいました。たとえば艾思奇の『大衆哲学』、毛沢東の『中国革命中国共産党論』などを全部読みました。もちろん蔣介石の『中国之命運』や孫文の『三民主義』も読みました。これらの本は上級生が日本に旅行した際に内山書店で買ってきたものでした。建国大学の図書館にはマルクスの『資本論』などがありましたが、普通の学生は思想犯として捕まえられる心配があ

ったので借りる勇気がなかったのです。ですから図書館からは盗むようになりました。もうひとつは上級生が日本から買ってきた本を読んでから中ソ会を組織しました。中ソ会の会員は憲兵に逮捕されて一部分の本は憲兵に没収され一部分の本は学生に分散されました。わたしたちが学校に入ると、同郷人は同郷人に了解したうえで本を貸したものです。建国大学の学生が進歩的な書籍に接触する方法はこのようなものでした。つまり彼らは上級生から下級生へ本を貸したり、同郷人（出身地が同じ人や出身学校が同じ人）同士で貸し借りをしたり、大学図書館から盗んだり、書店での購入などの方法で図書を手に入っていた。

またある中国人学生によると<sup>35)</sup>、「建国大学には指導学生というのがいて、新入生の指導や世話をするのだが、入学早々、指導学生が指導に来た。私の指導学生は万興治さんだった。陰で、中国人の上級生はいろいろな中国事情、いわゆる抗日戦争の事情などを下級生に伝えた。魯迅の本、巴金の本、毛沢東の本などを陰で読ませたり、陰で読書会や討論会を開いたりした。なかでも特に相当進歩した人は建国大学を離れて共産党管轄地区に行く人もいた」という。またある学生は、「反満抗日の本を読むときは、本に、例えば『天皇陛下万歳』とか『民族協和』と書いたカバーをかけた。中身はマルクス主義や三民主義に関係のある本だった」と証言している<sup>36)</sup>。「建国大学研究院の資料室からソ連の『真理報』（ソ連共産党中央委員会の機関誌、プラウダ）を数部盗み、中国人学生同士で密かに回し読みをするために、世界各地の戦況を中国語に翻訳し<sup>37)</sup>」て回覧することもあった。「我々が読書するとき、日本人を警戒する必要があった。入学したばかりの頃は、日本人学生がいなかったので、よく塾内の自習室で読み、放課後は教室で読んだ。日本人学生が来てから、多くは本の表紙を外国語書物や日本書店で出版された本や偽満出版の小説などとすり替え偽装し、日本人の目を騙していた<sup>38)</sup>」という。

中国人学生が読書で学んだことは、文学、政治、経済等、多岐に渡った。中国人学生は建国大学の自由な環境をうまく利用しながら、同塾、同郷人同士の交流を行い、非常に真剣に読書に取り組んだ。極秘に行われた読書であったが、その行動は静かな活気にあふれたものであり、真面目に読書をしない中国人は白い目で見られたこともあったという<sup>39)</sup>。

中国人学生は読書を通してさまざまな知識を吸収した。それが彼らの民族意識の高揚につながったと考えられる。個々で行われていた読書であったが、次第に中国人学生は「読書会」といわれるグループを秘密裏に組織するようになった。初めの頃は、みなそれぞれに読書することで独学していたが、お互いに本を貸し借りするようになり、自然と「読書会」につながるグループが形成された。4期生聶長林の回想によると、同塾の数人と図書の貸し借りをを行い、「特に2期、3期生の先輩は、下級生に本を貸すのが自分の負うべき義務のように、熱心に世話をしてくれた」という。こうして図書の貸し借りから始まり、それから読書についての交流、そして「読書会」へと発展した。聶長林はこうして友人4人と読書会を組織した。実際、建国大学でどれだけの読書会が組織されたかは確認のしようがない。この読書会は全く自発的なものであり、その存在は極秘とされ、他の中国人に対してさえ秘密にし、決して口外されることは

なかったからである。

中国人学生の図書の入手法を彼らの回想録から整理すると、次の通りである。建国大学図書館、建国大学研究院図書館の他に、新都市内の書店、古本屋、東京神田の内山書店、外部との接触による方法などであった。また塾頭から借りることもあったという。塾頭の中には多くの中国語書籍を所蔵している者もいた。ある中国人学生の証言によると<sup>40)</sup>、「我々が読んだ進歩的書籍の多数は上級生から借りてきたものであった。彼らには秘密の大衆的な集まり『読書会』があって、進歩的書籍の入手法があり、例えば、「文芸小説と歴史書は小さい書店から買えた。当時新京の南広場の西に青年書店があった。日曜日はいつもそこに行き、店主と顔見知りになると、時々欲しい本が手に入った。私はまた手紙で日本東京の内山書店と連絡を取り、そこから2回まとめて大量の書籍を仕入れたことがあった」。また、「私は長春市内の軍官学校、法政大学、工業大学の同級生らと連絡を取り合い、彼らから本を借りたり、自分の本を彼らに貸したりした。危険を感じたときは彼らのところに本を隠し、捜査を免れていた」という。特に内山書店と建国大学研究院図書館は、彼らにとっては有益な図書の宝庫だったようだ。研究院図書館には禁書が多く、夜間に無断で持ち出すこともあった。

多くの中国人学生には「たえず書籍刊行物から栄養を吸収し、理論上民族圧迫と民族搾取の根源を明らかにするようになって、はじめて真の民族意識の覚醒が得られる<sup>41)</sup>」という考えがあり、それゆえ読書に力を注ぎ、読書を通して「我々は中国人である」という意識が深化し、彼らの民族意識は反満抗日へと向かっていったと考えられる。

### 3 建国大学生の逮捕と建国大学の対応

前節で見たように、中国人学生にとって、建国大学には彼らを反満抗日に向かわせる要素があらゆるところに存在した。彼らはそれらを逆に利用することで「我々は中国人である」ことを忘れないようにし、その民族意識は抗日救国のための行動につながることとなる。

満洲国では反満抗日組織による抵抗は強く、常に脅威を感じていた満洲国政府はその制圧に力を注いでいた。そのような中で、1941年末以降、建国大学にとって極めて重大な事件が発生した。本節では、満洲国における反満抗日組織に対する大規模捜査と、それに合わせて建国大学生が逮捕された事件について述べる。

#### 3-1 国民党地下組織の大摘発と12・30事件

1941年12月30日、反満抗日組織に対する大規模な摘発が行われた。「12・30事件」と呼ばれる大摘発は、満洲国の反満抗日運動における重要な事件の一つである。

1941年は、12月に日本がハワイ真珠湾を攻撃、米英に対して宣戦を布告、また同時期、蔣介

石の国民政府が日独伊に対し宣戦を布告した年である。満洲国においては、太平洋戦争の影響で物価が上昇し、人々の生活は困窮を極めていた。満洲国では 1941 年 4 月から生活必需品の配給制が実施されていたが、さらなる物価上昇が人々に追い打ちをかけ、食料を調達するのが非常に困難となり、餓死者が出たほどであった。

1941 年末、満洲国の広い地域で大規模な抗日組織の摘発が行われた。この摘発は満洲国の主要都市、特に新京、哈爾濱、瀋陽等において行われ、知識青年、学生、青年公務員らを中心に、彼らが組織した反満抗日運動に対する弾圧であった。これらの組織は主に国民党系の地下工作員によるものであった。12・30 事件の検挙の手は、後に建国大学にも及んだ。

12・30 事件から少し遡った 1941 年 5 月、斉齊哈爾憲兵隊は、スパイを通じて国民党地下工作員が斉齊哈爾市内に潜伏しているとの情報を得た。後述するが、「田白工作」と呼ばれる摘発があり、それによる逮捕者の取り調べから国民党地下工作員に関する情報が得られた。

1941 年 7 月 25 日、鉄道職員を中心とした秘密組織である「執委部」が斉齊哈爾に設立された。その中核メンバーは、1937 年に設立されたものの間もなく活動停止となった「七人組」のメンバーであった。「七人組」は国民党に傾倒した秘密組織である。執委部は東北抗日聯軍三路軍の統率下に入っていた。1941 年 9 月から 10 月にかけて、東北抗日聯軍三路軍は討伐され、その際に犠牲となった東北抗日聯軍三路軍九支隊参謀長であった郭鉄堅の所持品から執委部の報告資料が見つかり、それによって国民党地下組織の摘発が始まった。1941 年 11 月 9 日から 15 日にかけて、関東憲兵隊は「田白工作」と呼ばれる大摘発を実施した。捜査の範囲はチチハル、哈爾濱、新京、吉林および関内の済南等の地にまで及び、逮捕者は計 125 名であった。しかし逮捕者のほとんどは無実の一般民衆であったとされる。最終的に刑を受けた者は 38 人で、そのうち 8 人は虐殺され、刑を受けた者の大部分は鉄道職員であった。

田白工作が一段落した後、12 月 8 日から斉齊哈爾憲兵隊長の星実敏は捜査班を組織し、「貞星工作」と呼ばれる大摘発を実施した。12 月 17 日、斉齊哈爾では 100 人以上が逮捕され、錦州では逮捕者 40 人以上となり、最終的に 40 人以上が死刑を含む各種の刑に処せられた。

その後 1941 年 12 月 30 日、「12・30 事件」と呼ばれる一斉大摘発が実施された。貞星工作と 12・30 事件による逮捕者は、青年学生と文化人が大きな比重を占めていた。彼らのうち、ある者は国民党地下組織のメンバーで、ある者は共産党組織に加入を希望していた共産主義を信奉する者であった。12・30 事件およびその後幾度もの関連する大摘発において、逮捕された者の多数は、国民党員または国民党に傾倒していた青年であった。12・30 事件では相次いで 500 人余りが逮捕され、各警察機関が新京、奉天、哈爾濱、錦州、斉齊哈爾等 5 つの高等検察庁に送致されたものだけでも 239 名であった。貞星工作に続く 12・30 事件は一連のものである。あるいは前者は後者に含まれるものと考えられている<sup>42)</sup>。

12・30 事件は満洲国における重大な事件の一つとされている。この時逮捕された学生は、軍

「満洲国」の建国大学における中国人学生の反満抗日運動（中山紀子）

官学校、哈爾濱医大、哈爾濱農大、錦州農大、新京工業大学等の学生であった。12月30日の一斉摘発後の翌42年3月、建国大学生が逮捕された。建国大学生の逮捕は建国大学および満洲国に強い衝撃を与え、当時建国大学の副総長だった作田莊一はその責任を取る形で副総長を辞任した。

### 3-2 国民党地下組織と建国大学同志会

1942年3月2日午後の授業中、関東憲兵隊は建国大学を包囲し、塾頭の新田伸二に案内させて教室に踏み込み、学生13名を逮捕した。彼らは直ちに関東憲兵隊司令部の地下拘置所に連行され、過酷な取り調べを受けた。逮捕当時学内にいなかった2人も別の場所でそれぞれ逮捕された。また、この3か月前に1名が逮捕されており、また1か月ほど前にも1名、瀋陽で逮捕されている。こうして合計17名の建国大学生が反満抗日の罪で逮捕される事態となった。

逮捕された中国人学生は、建国大学において極秘裏に「建国大学同志会」を組織していた。1940年5月、1期生の柴純然、2期生の佟鈞鎧および王用中は、国民党東北抗戦機関の新京における責任者であった張補三と連絡を取り、建国大学反満抗日組織「建国大学同志会」を組織した。1941年9月には、建国大学同志会を「建国大学幹部会」と改称し、楊増志、柴純然、陳学博を幹事に選出し、楊増志を総幹事とした。建国大学幹部会では、メンバー内で魯迅、肖軍、譚嗣同、梁啓超、孫中山、陳独秀、胡適などの作品を回し読みし、時には秘密裏に集会を開き、抗戦状況を把握し、愛国意識を奮い立たせ、反満抗日思想の拡大にあたった。1941年7月中旬、楊増志の発案にて、夏休みを利用して仙山の無量観（道教寺院）に2日間滞在した。そこで張補三から抗日戦争の情勢と彼らの任務を教えられ、積極的に活動していくことを話し合った。同年10月、建国大学幹部会は佟鈞鎧と陳東旭が秘密刊行物『前哨』を編集することを決定し、メンバー内で閲覧した。

しかし1942年1月、この組織は摘発され、3月2日、17人のメンバーが逮捕された。メンバーのうち陳学博と崔万賢の2名は逃走することができた。建国大学生の逮捕と同時に、新京法政大学の中国人学生2名も逮捕された<sup>43)</sup>。

逮捕された中国人学生の判決は、翌43年4月7日に高等法院において下された<sup>44)</sup>。

被告	楊増志 (1期)	求刑	無期懲役	判決	無期懲役
	柴純然 (1期)		無期懲役		無期懲役 (獄死)
	佟鈞鎧 (2期)		懲役15年		懲役15年
	陳東旭 (2期)		懲役13年		懲役13年
	李樹忠 (1期)		懲役13年		懲役13年
	王用中 (2期)		判決前獄死		

胡毓崢 (1 期)	懲役 13 年	懲役 13 年
閻鳳文 (2 期)	懲役 10 年	懲役 10 年
那庚辰 (1 期)	懲役 10 年	懲役 10 年
董国良 (3 期)	懲役 10 年	懲役 10 年
喬国玉 (3 期)	懲役 10 年	懲役 10 年
閻樹臣 (1 期)	懲役 10 年	懲役 10 年
赫崇文 (2 期)	懲役 10 年	懲役 10 年
馬維良 (2 期)	懲役 10 年	懲役 10 年
李首春 (1 期)	懲役 10 年	懲役 10 年
孫宝珍 (1 期)	懲役 10 年	懲役 10 年
孫春齡 (1 期)	判決前に逃亡	

建国大学生が逮捕されたことは満洲国に衝撃を与えた。建国大学は満洲国の将来を担う人材を養成する大学であるため、その建国大学から「政治犯」が出ては、建国大学の存在意義が揺らぐこととなる。副総長作田莊一はこの事件を知らされた時「しまった」と思ったとのことである。作田は当時の様子を次のように述べている<sup>45)</sup>。「或日私は市中にて或る会合に出て居た時に、大学から電話がかかってきた。『只今憲兵隊が塾に来て、反満抗日の政治犯人と言う容疑にて、満人系学生 18 名をトラックに載せて連れ去った』と。私はこれを聞いた刹那に『しまった』と心の中で叫んだ。それは我々の虚を衝いた意外の出来事であったからである。---(中略)---多数に上る謂ゆる満洲系学生は、漢民族出身者が多数に上って居るので、これが中国の国民党から誘惑される懸念が多かった。その国民党の方面から誘惑の手が伸び、同族学生の間にも知られないような連絡があつて、遂に反満抗日に陰謀犯として学園から拉し去られたのである。これは極めて起こり易い事件であつたが、それを事前に制し得なかつた大学の失態は弁明の余地がなかつた」。作田は「最後の考慮として、事犯学生の処理を保安警察の手から学校教科の手に移すことが出来るかどうかを探つて見たが、それが出来ないことを知つた時に直に辞職を願ひ出た」。作田はこの事件の責任をとる形で、建国大学副総長を辞任することとなつた。

建国大学の教員や学生は、逮捕された学生を見舞ひ、何度も監獄を訪ねている。ある中国人学生の回想によれば、「教授と塾頭の青木と石中、そして学生(劉興潭、楊慶澍、董大昌と私[顔廷超])は監獄を訪ねた」とのことである<sup>46)</sup>。作田莊一も、「青木塾務科長の配慮によって、先に政治犯によって新京刑務所に服役して居る元学生達を慰問した。刑務所では好意を以つて迎え、特に一室に一同を集めて貰つたので、青木氏と共に暫く一同と語り合つた」という。

建国大学では、12・30 事件による建国大学生の逮捕について、現場にいた人以外は、教官も学生もこの事実を知らなかつたという<sup>47)</sup>。

これまで述べてきたように、建国大学の中国人学生は、作田の言う「国民党から誘惑され」

「満洲国」の建国大学における中国人学生の反満抗日運動（中山紀子）

たのではなく、「自発的に」反満抗日運動に関わっている。これは中国人学生の回想録を見ても明らかである。ここに、大学当局と中国人学生の反満抗日運動に対する認識の違いがはっきりと見出せる。

### 3-3 軍人・尾高亀蔵の副総長就任

建国大学生の逮捕をきっかけに、作田荘一はその責任をとって辞任し、後任には尾高亀蔵が副総長に就任した。尾高亀蔵はかつて日露戦争に参戦、張鼓峰事件では第19師団師団長であった。建国大学の中国人学生からみれば、尾高亀蔵の副総長就任は、満洲国の建国大学に対する監視を強化する目的だと捉えられた。尾高亀蔵は塾生活の規則が定められた「塾務規定」を改定した。それは中国人学生からみれば高圧的な政策転換であり、明らかに中国人学生の行動をにらんでのことであった。塾務規定の改定により休暇申請が厳しくなり、また図書検査も行われた。図書の検査は、学生の授業や訓練、あるいは夜間眠っている間に行われ、彼らの寝具、寝床、リュックサック、衣類の保管場所および自習室などを頻繁に検査した。これ以上、建国大学から「政治犯」を出すことはできなかつたためである。

### おわりに

建国大学は塾生活により「民族協和を实践」し、自由で平等でなければならなかつた。また満洲国建設を担う人材として「相応しく」ならなければならない。尾高亀蔵による塾務規定の改定等の政策転換は、12・30事件後の建国大学にとって必要な措置であつた。12・30事件以前は、作田荘一の教育方針により、学問の自由が確保されていた。しかし12・30事件により建国大学生が逮捕されたことの意味は非常に大きく、作田のこれまでの教育方針は否定される形となつた。満洲国の中枢へ人材を送り出すべき建国大学は、中国人学生の反満抗日運動に対する取り締まりを強化することでその存在意義を保つ必要が生じた。前任の作田壯一副総長の探つていた教育方針からの転換であつた。尾高亀蔵の副総長就任と塾務規定の改革は、さらに中国人学生の民族意識を高めるきっかけとなつた。

建国大学では、満洲国のいう「民族協和」のスローガンの下、建国大学にいる全ての学生を一つにまとめるために、自由で平等な理想を掲げ、共存共塾により全民族を融合させようとした。しかしその裏では、塾務規定を改定し中国人学生の監視を強化した。満洲国のいう「民族協和」の実現のために、民族を区別する必要が生じ、そのための政策が行われたということだろう。

満洲国のいう「民族協和」とは、建国大学での反満抗日運動に積極的に参加した中国人学生からみれば、日本人が優越的立場にある極めて小さく限定された単なる「共存」でしかなかつ



た。

中国人学生は建国大学に入ってから、主に読書を通して、同塾、同学年、同郷人同士で強固につながり、互いのアイデンティティを共有した。そしてさらに、反満抗日へと向かう政治的なアイデンティティの観念を生み出したと考えられる。それにより、建国大学ではいくつかの小集団が形成され、散在していた思考が次第にまとまりを見せ、それぞれに理想を抱き活動をした。知識を吸収したアイデンティティの集合体は肥大し、そこから派生した民族意識は建国大学の外と繋がった。満洲国が誕生して「満洲国人」とされた彼らにとって、建国大学における反満抗日運動とは、抑圧されたアイデンティティを解放させることであったと考えられる。決して「中国人である」ことを忘れず、反満、抗日、その先の「救国」のために、彼らの民族意識は満洲国およびその背後にある「帝国日本」に向かったのである。

### <注>

- 1) 満洲国史編纂刊行会編『満洲国史 各論』、1971 年、1048 頁
- 2) 『国勢パンフレット第 2 輯 新学制の大要』満洲帝国国務院総務庁情報処、1937 年、8 頁。以下、引用にあたって漢字は原則新字体を用い、片仮名の場合は平仮名に改めることとする。
- 3) 満洲国の「国語」について、安田敏明は論説『『王道楽土』と諸言語の地位—『満洲国』の言語政策・試論—』（34～35 頁）の中で、当時の日本人教育者や学者は教育科目としての「国語」と国家語としての「国語」を混同していたと指摘している。（安田敏郎『『王道楽土』と諸言語の地位—『満洲国』の言語政策・試論—』『アジア研究』42（2）、1996 年、29～62 頁）
- 4) 「建国大学学則」（康徳 7 年 5 月 10 日院令第 20 号）『康徳八年度 建国大学要覧』、20 頁
- 5) 湯治万蔵編『建国大学年表』、1981 年、392 頁
- 6) 聶長林・記、岩崎宏・日文校訂『幻の学園・建国大学—中国人学生の証言—』建国大学 4 期生会誌「楊柳」別冊、1997 年、41 頁。本書は聶長林氏の建国大学についての回想である。聶長林は中国記者協会、新華社、人民日報社の記者を務め、駐日本首席記者も務めたことがある。“離休”前の職業は人民日報社の記者である。（離休とは新中国成立以前に革命に参加した幹部の退職をいう）。全国教育科学「九五」「十五」重点課題『日本侵華植民地教育口述歴史研究』の顧問である。
- 7) 建国大学 8 期生、谷学謙氏への聞き取り調査より（2014 年 7 月 6 日）。谷学謙氏は、離休前の職業は東北師範大学外国語学院日本語科の教授で、1970 年代に東北師範大学の日本語科創設に尽力され、1980 年代には日本語教育学会常務理事を務めた。谷学謙氏の父は満洲国外交部に勤め、伯父は満洲国交通部大臣、谷次亨である。
- 8) 「ハルビン工業大学において—肇永和 証言」、齊紅深編著、竹中憲一訳『「満洲」オーラルヒストリー（奴隷化教育）に抗して』皓星社、2004 年、219 頁
- 9) 「吉林師道大学の思い出—林鼎欽 証言」、齊紅深、前掲書、242 頁
- 10) 谷学謙氏への聞き取り調査より（2014 年 7 月 6 日）
- 11) 「建国大学令」（康徳 4 年 8 月 5 日勅令第 234 号、同 5 年 9 月 1 日勅令第 224 号、同 7 年 4 月 15 日勅令第 73 号を以て改正、同 8 年 6 月 23 日勅令第 158 号を以て改正）『康徳八年度 建国大学要覧』、12 頁。「建国大学学則」、前掲書、20 頁
- 12) 岳亦石「我离开建大到重庆」长春市政协文史和学习委员会编『回忆伪满建国大学』长春文史资料总第 49 辑、1997 年、117～118 頁
- 13) 佟钧铠（赵洪）「我在伪建国大学的抗日斗争」、长春市政协文史和学习委员会编、前掲書、125 頁
- 14) 「建国大学令」、前掲書、11 頁
- 15) 「大学年記」、前掲書、3 頁
- 16) 「建国大学学則」『康徳八年度 建国大学要覧』、21 頁
- 17) 「満洲建国大学学生募集広告」『官報』、1937 年 8 月 12 日、382 頁
- 18) 「大学年記」、前掲書、3 頁。この時前期 2 年に入学した日系学生は、3 期生と同学年だったことから、

「満洲国」の建国大学における中国人学生の反満抗日運動（中山紀子）

戦後、建国大学同窓会においてこの年の日系学生を新制3期と名称が変更された。

- 19) 山根幸夫『建国大学の研究－日本帝国主義の一断面－』汲古書院、2003年、224～225頁
- 20) 聶長林、前掲書、60頁
- 21) 日本の外務省事業部が行った満洲国および「北支」の日本語教育の調査によると、建国大学生の日本語能力は「漢蒙人は発言困難なると漢字をよむことにより大体の意味を知らんとするための障害あるも一般に同語系なるといと公学校中学校卒業にして素養あるため進歩早し」と報告されている。また「日本語教育上寮生活を営み日常語を主として日本語を用ふことは進歩の上に資するもの大なり」との評価が加えられている（外務省事業部「満洲及北支ニ於ケル日本語教育ニ就テ」（支那視察報告第七号）昭和十四年十一月）。JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B05016095000、参考資料関係雑件 第十卷(H-7-2-0-4\_010)(外務省外交史料館)
- 22) 作田荘一の「満洲国学」については、宮沢恵理子、前掲書、134～152頁に詳しい。
- 23) 建国大学図書館構想については、大場利康「満洲帝国国立中央図書館籌備処の研究」『参考書誌研究』第62号、2005年、25～30頁を参照。満洲国「国立」図書館といっても、その構想から設立準備に至る過程は、日本から満洲国に渡った関係者の手によって進められた。なお、国立中央図書館については、弥吉光長の論考がある。
- 24) 大場利康、前掲論文、34～35頁
- 25) 湯治万蔵、前掲書、30～31頁
- 26) 「満洲国建国大学に北京科学図書館書籍利用方に関する件」（1937年7月7日付、在満日本帝国大使館参事官澤田康三より外務次官堀内謙介宛て書簡）。JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B05015174200、北京図書館関係雑件 第三卷(H-3-1-0-3\_003)(外務省外交史料館)
- 27) 「建国大学創設要綱（抄）康德4年8月5日広報掲載」『康德八年度 建国大学要覧』、7頁
- 28) 「東方文化事業総委員会図書館図書に関する件」（昭和12年12月15日）、JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B05015174200、北京図書館関係雑件 第三卷(H-3-1-0-3\_003)(外務省外交史料館)
- 29) 大場利康、前掲論文、30頁。
- 30) 「建国大学に対し図書寄贈の件六月」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B05016050700、寄贈品関係雑件 第二十一卷(H-6-2-0-26\_021)(外務省外交史料館)
- 31) 湯治万蔵、前掲書、363頁
- 32) 湯治万蔵、前掲書、119～121頁
- 33) 山根幸夫、前掲書、136頁
- 34) 『満洲国』教育体験者座談会の記録（2）、「満洲国」教育史研究会編『満洲国』教育史研究：日中共同研究』第2号、1994年、東海教育研究所、95頁
- 35) 谷学謙氏への聞き取り調査より（2014年7月6日）
- 36) 志々田文明「孫群（孫宝珍）氏 建国大学時代を語る」、「満洲国」教育史研究会編、前掲雑誌、112頁
- 37) 刘世泽「偽滿建国大学」『沈陽文史資料』第9輯、1985年、128～129頁。
- 38) 王璟琳「建大讀進歩書刊活動札記」、長春市政協文史和学习委員会編、前掲書、185頁
- 39) 王璟琳、前掲回想録、185頁
- 40) 王璟琳、前掲回想録、184頁
- 41) 佟鈞铠（赵洪）、前掲回想録、126頁
- 42) 田白工作、貞星工作、12・30事件については、解学詩『偽滿洲国史新編』人民出版社、1995年、491～493頁を参照。
- 43) 「建大同志会」「建大幹部会」については、唐継革・王野光・王建・姜杰、長春市政協文史和学习委員会編『長春二百年（1800－2000）』長春文史資料总第59輯、2000年、121～122頁を参照。
- 44) 山根幸夫、前掲書、236～238頁。逮捕された学生はひどい拷問を受け、その様子は残虐で悲惨なものであったという。
- 45) 湯治万蔵、前掲書、88～91頁
- 46) 顏廷超「偽滿建国大学始末摘記」、長春市政協文史和学习委員会編、前掲書、25頁
- 47) 山根幸夫、前掲書、240～242頁

主指導教員（真水康樹教授）、副指導教員（猪俣賢司准教授・稲吉晃准教授）